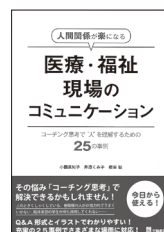


小蘭真知子, 井原くみ子, 櫻田 毅 (著)

人間関係が楽になる 医療・福祉現場のコミュニケーション コーチング思考で“人”を理解するための25の事例

菊 池 恵美子
(帝京平成大学, 作業療法士)



あなたは今, こんな状況にありますか? 「決めてくれない上司にイライラする」, 「何度教えても覚えてくれない実習生に失望してしまう」, 「他職種の人が非協力的でうまくいかない」, 「臨床実習の学生が何も質問してくれない」, 「院内業務改善のリーダーに指名されたが, できるか不安」, 「研究会の発表がまわってくるのが怖い」等々, 本書は, このような職場の人間関係にストレスを感じはじめた臨床経験3年くらいからのセラピスト, 作業療法科の主任, はたまた職場で「長」が付きはじめた人々のために解決の方策やヒントを与えてくれる。

副題に「25の事例」とあるが, ストレスを抱えた脳が拒否しないよう, 読みながら……「ある, ある, それで? そうかあ! ……そうかもしれない!! 明日やってみようかな!!!」と気軽に読めることが本書の特色で, 25事例のすべてが, 悩みと対応策, コーチング思考, 行動のヒント, そして, さらにもう一步, の順で書かれたハウ・ツー本である。

まず, 序章では, 職場の良好な

人間関係を築くための「“コーチング思考”とは?」が紹介されている。それも, スポーツのコーチではなく, 相手の特性を活かしながら最適な答えを自分自身に気づかせるためのサポートと知れば, 自ずと次章を読みたくなるというものである。第1章は, 7事例について, “人の言動には必ず理由がある”ことを前提に, 目の前で起きていることを理解するうえでの視点の変え方に関する7つのヒントが書かれている。次いで, 第2章のタイトル, 「過度な期待がいらだちを生む」では, 思わず夫の顔が浮かび……反省させられた。第3章, 「相手を知ればストレスが減る」で登場する臨床実習生の2事例は, 一人でも多くの実習指導者に読んでいただきたい。本書では, 実習生が何も質問をしないときの彼らの思いを, 「質問って言われても, 一度にたくさんのことを説明されて, 何が何だかわからないのに……」と代弁し, 指導者は, 実習生が質問しないという現象面を問題視することなく, そもそも臨床実習の目的が何かをもう一度考えてみてほしい, と説く。

つまり, 実習の目的は質問をしてもらうことではなく, 体験を通して「必要なことを正しく学習してもらうこと」であり, そのために指導者としてあなたができることに視点を移してみれば? と助言している。第4章, 「自分の中の勇気を呼び覚ます」では, コーチング思考は実践してこそ意味があることを再認識できると思う。

著者らは, 臨床経験30年のベテランST (現在は教育に従事) の小蘭真知子氏, 国際コーチ連盟認定プロフェッショナルコーチの井原くみ子氏, そしてアークス&コーチング代表の櫻田 毅氏で, 保健医療専門書にありがちな小難しさ感 (失礼!) がないことも嬉しい。

職場の関係がギクシャクするとき, 「自分が相手を許せば楽になる!」ことをあらためて本書は気づかせてくれる。

A5判 130頁 1,800円+税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357